古道調査・秩父往還（二瀬～麻生～上中尾～栃本～川又）下見調査報告

2022.12.12

日　時　：令和３年７月 17 日（土曜日）、天気：晴れ

令和４年１月 01 日（土曜日）、天気：晴れ

メンバー：L.松本敏夫、小島千代美、浅田　稔、本村貴子、野口勝志、児嶋和夫、林　信行

コース記録：

二瀬ダム駐車場（9:00 - 9:15）～二瀬隧道(9:20）～登山口・道標「栃本 6.4km・大黒山を経て大峰 4.8km－秩父湖 0.3km」(9:23）～テニスコート・展望広場(9:29)～送水管上部の陸橋（9:43）～民宿・梅林右側の石仏２基（9:48）～旧国道 140 号に合流・二瀬バス停（9:55）～福寿神社・麻生公民館(10:01)～麻生バス停・麻生加番所跡(10:07)～山神の祠（？）(10;17)～六地蔵・四十九院塔・石仏（10:18）～寺井諏訪神社の鰐口説明板（10:21）～鬼鎮神社・福井神社・寺井地区集会所（10:24）～寺井諏訪神社跡（？）（10:43）～地蔵尊（11:13）～上中尾区集会所（11:22）～琴平神社・吉備津神社（11:25）～上中尾バス停（11:31）～如意輪観音（石水寺跡？）（11:36）～閻魔堂（11:37）～旧上中尾小学校バス停(11:45)～上中尾の猪垣入口（11:45）～猪垣（11:57）～馬頭尊等石仏３基(12:21)～栃本公衆トイレ・林平バス停（12:40－13:00）～田部重治・清水武甲歌碑（13:09）～大峰遊歩道入口・石の道標（13:16）～栃本関所跡（13:19）～日本の道百選「秩父往還」石碑・栃本会館（13:23）～石仏４基（二十二夜塔など）（13:25）～妙見神社（13:28）～甲州及び信州道分岐の石の道標（栃本バス停）（13:30）～千軒地蔵尊（13:34）～東京大学農学部附属秩父演習林栃本作業所（13:45）～川又バス停（13:51）～駒ケ岳橋（15:30）～二瀬ダム駐車場（15:40）

記録

日本山岳会の山岳古道調査プロジェクトから提示された埼玉支部担当の第一次山岳古道調査対象は、「雁坂峠越え」及び「十文字峠越え」です。両峠越えの起点となる場所は秩父市栃本（川又も可）になります。旧秩父大宮から栃本に至る旧秩父往還のうち、麻生（二瀬ダム）から栃本・川又間は、旧道が旧国道 140 号として大部分が現在も利用されている車道ですが、古道調査の一環として現状を調査することを目的としました。

天気予報を確認しながら日程を決めたため、梅雨明け直後の猛暑の中の調査となりました。参加者７名は９時前後に二瀬ダムに集合し、調査コース確認等の準備を行った後、駐車場を出発しました。最初に抜ける二瀬隧道は、入口のプレートに「1977 年 11 月、関東地方整備局」と記され、国土交通省の管理とわかります。二瀬ダムの右側に道標「栃本 6.4km・大黒山を経て大峰 4.8km－秩父湖 0.3km」が設置され、旧秩父往還への最短ルートであると共に、大峰山への登山口となっています。二瀬ダム管理所発行の「二瀬ダム四季の生きものと周辺散策マップ」によると、ダムの完成は昭和 25 年（ダム管理所に問い合わせた結果、昭和 36 年の誤りと判明）で、農業用水確保と水力発電を目的とした多目的ダムで、ダム湖は「秩父湖」と呼ばれ、秩父宮妃の命名によるとのことです。また、二瀬ダムや秩父湖が見

渡せる展望広場へと続くジグザグの道は「大峰遊歩道」と記されています。

二瀬ダム

二瀬隧道

大峰遊歩道入口

古く一部が破損しているテニスコートを通り、東屋のある展望広場の手前右側から急坂を上ると送水管上部の陸橋にでます。この手前右側が旧秩父往還で、大久保地区から麻生へと続く旧道です。ただし、道標は設置されてないので、地図で確認が必要になります。車道横に古びた道標「大峰山・栃本方面-秩父湖バス停」が設置されています。車道を直進する道は僅かに登りとなる大峰山方面への道ですが、麻生及び栃本にも行けます。左側のわずかに下る車道が麻生及び栃本方面への古道と考えられます。どちらの車道も福寿神社前で合流することから、いずれが旧秩父往還なのか判別は困難でした。

展望広場の東屋

二瀬ダムと秩父湖

送水管の陸橋

今回は左の麻生への車道を選択し、杉林の中を下ると民宿・梅林が前方右手に見えてきます。民宿の右隣に石仏 2 基（馬頭尊の文字塔は大正十三年一月、施主 山中金作と読める。一方は崩れかけた馬頭尊）があり、古道の趣が伝わってきます。左からの旧国道 140 号が合流する分岐に「秩父ユースホステル／民宿旅館・ばいりん」及び「国指定記念物（史跡）栃本関跡　4.2Km」の標識があり、向かい側は秩父市営バス・川又線の二瀬バス停（三峰口駅 - 大滝温泉遊湯館 - 川又）で、時刻表によると運航は一日に 4～5 本でした。

古い道標

石仏 2 基

旧国道 140 号線へ合流

旧国道 140 号を右に進むと間もなく右に福寿神社があります。神社前では送水管上部で分岐している大峰山・栃本方面からの車道が合流し、こちらが旧道と云われれば納得しかねない状況です。福寿神社に説明板は無く由緒等は不明ですが、笠木の付いた立派な鳥居があります。新編武蔵風土記稿に「福壽院　下納組にあり、山號なし、境内除地五畝十二歩本尊十一面観音、明暦年時に焼失して再建せず、慈眼院兼帯せり、」とありますが、明治元年の神仏分離令により神仏習合の福壽院から、福寿神社に変わったものと推測されますが、詳細は未調査です。左隣には麻生公民館があり、「この施設は、水源地域対策特別措置法に基づく水源地域整備事業により建設されたもので、下流受益者の交付金が含まれております。埼玉県・秩父市」の説明書が掲示されています。社殿の右側に石仏「地蔵尊、如意輪観音、馬頭尊、愛宕地蔵大菩薩など」が集められていますが、どう見ても寺院跡（福壽院）と思われても仕方がありません。

旧秩父往還

福寿神社

福寿神社の石仏群

麻生バス停を過ぎると国道の右側に麻生加番所跡があります。入口の右側に説明板があり「麻生加番所跡　昭和四十五年十一月三日　市指定史跡　寛永二十年（1643）幕府の役人が当村巡見のさい、栃本関の警備の手うすなのを見て、麻生に加番所を設置するよう指令があり、設置されたものである。施設は簡単で名主宅を役所とし別に間口三・八メートル、奥行二・七メートルの番人詰所があった。この番屋の建設補修費総て古大滝村の村費によりまかなわれた。番屋は現存せず現在の家は安政四年（1857）十一月焼失のため新築されたもので、今も同家を番所とよんでいる。千島家は鉢形北条の奉行、千島下総の末裔といわれている。　秩父市教育委員会」と記されています。一方、風土記稿に「加番所一ヶ所　上中尾の内麻生にあり、ここは栃本の東一里許にあり、即ち栃本の加番所なり、・・・此番所は寛永年中大岡忠右衛門・黒川八左衛門が巡見せし時、小村の有りさまを見て、非常の警備に加番所を立べしと命ぜられしよし以来、ここにこの番所を立て、下納組・上中尾組・大久保組・都合三組の内にて、廿五人の民輪番に務と云」と記載があり、加番所設立の経緯や村民の役割・負担が記されています。

麻生加番所

麻生加番所前にて

麻生加番所説明板

国道の曲がり角に山神（？）の祠「側面に大正七年一月吉日、千嶋孝治と記載」がありました。祠の先の右側に六地蔵と石仏等 3 基（地蔵尊は享保七年八月、石仏は天明三年、四十九院塔）が並んで設置されていることから、寺院跡または墓地と推測されますが由緒等の記載はありません。その先に寺井諏訪神社の鰐口説明板「寺井諏訪神社の鰐口　秩父市指定有形文化財　所在地：秩父市大滝 3723 番地 2　指定年月日：昭和四十五年十一月三日　諏訪神社の社前に吊るされているこの鰐口は、径 25.5cm、厚さ 10cm の大きさである。表に左上から『應永廿二年未八月□日（1415）』、右上から『武州髙安寺霊通巽明神□』と刻されている。形・音質ともに良く、この種のものでは本市で最も古いものと思われる。平成三十一年三月　秩父市教育委員会」が鰐口の写真と共に設置されています。説明板はあっても、設置場所からは諏訪神社の影も形も見つけられません。

山神の祠？

寺井の六地蔵と石仏群

寺井諏訪神社鰐口説明板

鬼鎮神社・福井神社へは、国道から右に分岐した車道を十メートル程度登った左奥にあります。道標がないので注意が必要です。神社への石段の手前左手は平場になっていて寺井区集会所があります。埼玉県教育委員会による「秩父甲州往還」には、この場所に井福神社（福井神社？）と井福寺跡が記されています。井福寺跡は寺井公民館と記されていますが、現在の寺井区集会所と考えられます。前述の六地蔵や石仏群とは距離的にも近く、かつての井福寺とどのような関係にあったのか興味は尽きません。集会所横の急な石段の登った上部左に鳥居があり、右側の石碑には「大願成就記念之碑　三峯神社宮司廣瀬頼信謹書」と刻され、三峯山との親密な関連が推測されます。御神木の大杉を前に、向かって左が鬼鎮神社で、銀色に塗られた鉄の金棒が 3 本社殿前に掛けられています。社の内部には鬼鎮神社の扁額と金棒が多数奉納されていました。向かって右の社の内部に小祠があり、内部に数体の小さい仏像（持物や衣の状態から判断し、毘沙門天及び吉祥天などか？）が散乱しています。社の

右側に朽ちた木造の神像（？）の上半身が置かれています。神社名の表記はありませんが、こちらが「秩父甲州往還」に記載の井福神社と思われます。しかし、「秩父往還いまむかし」には、井福神社ではなく福井神社と記されています。神社名の変遷経緯は不明で興味を惹かれますが、詳細は未調査です。更に、「秩父往還いまむかし」には、鬼鎮神社は武蔵嵐山の菅谷から勧請されたものであると遷座の経緯を記載しています。

寺井区集会所

鬼鎮神社・福井神社

鬼鎮神社

別の機会に訪れた嵐山町の鬼鎮神社の説明板には「鬼鎮（きじん）神社　御由来　埼玉県比企郡嵐山町に、畠山重忠公が御造営された菅谷館（菅谷城）があった。当神社は、その鬼門除けの守護神として、鎌倉街道に沿って建立され、節分祭、勝負の神で有名である。約八百年前、安徳天皇の御代、寿永元年に創建され、御祭神は、衝立船戸神（つきたつふなどかみ）、八街比古命（やちまたひこのみこと）、八街比売命（やちまたひめのみこと）で、主神の衝立船戸神は、伊邪那岐命が黄泉の国を訪れた後、筑紫日向の橘小門の阿波岐原で、禊払いをして持っていた枝を投げ出した時、枝より生まれた神である。それが幅広く解釈されて、悪魔祓いの神、家内安全商売繁盛の神、受験の神と、人生の指針を示し、強い力を授ける神として崇められている。節分祭は、鬼鎮神社において一番大きなお祭りで、この日は、何千何万の人々が「福は内、鬼は内、悪魔外」と連呼する、日本でここだけの鬼の祭であり、境内は大変な賑わいを見せる。遠く千年の昔から、勇名を馳せた坂東武者、明治以降の出征兵士の崇敬篤く、戦後は受験必勝の神様として参拝者は後を絶たず、社頭を賑わしている。このようなことから『鬼に金棒』と昔から云われている金棒のお守り、祈願成就の赤鬼・青鬼の絵馬を授与される方が、非常に多い。　平成二十六年二月三日」と記されています。嵐山町の鬼鎮神社の河野通久宮司の話では、「約 30 年前まではバスを仕立てて大滝村からお参りに来ていたが、最近は全く来ない。」と少し残念そうな口ぶりが印象的でした。鬼鎮神社がどの様な経緯で大滝村の寺井地区に勧請されたかは不明ですが、鬼の強い力を授ける神としての信仰や家内安全などを祈願したものと推測されます。寺井区集会場の前の車道を上り詰めた奥の民家の駐車場から更に山道を登った先に潰れた廃屋があり、説明板や裏付ける証拠に乏しいですが寺井諏訪神社跡（？）と推定しました。

福井神社

木造の神像

寺井諏訪神社跡？

国道に戻り栃本方面に向かう右側の石垣の上に小祠がありますが、神名等は不明です。この先にも右上部に小堂に覆われた地蔵尊石像があります。上中尾区集会所の先で、国道が右に直角にカーブする所の左下に鳥居があります。巨岩の上に鎮座する金毘羅大権現を祀った琴平神社です。扁額のような立派なコテ絵「金比羅宮」が掲げられていて、「武蔵の国秩父宮地の住人・左官島崎詳乙作」と判読できます。鬱蒼とした巨杉や巨檜に囲まれた奥が吉備津神社と考えられますが神社名の記載はありません。「秩父往還いまむかし」に吉備津神社はお産の神として地元の信仰を集め、村指定天然記念物の杉と檜の巨木があると記されています。風土記稿に「吉備明神社　上中尾組にあり、同所及び下納組の内、字菅平の鎮守なり、村民持、金毘羅社、石水社・上中尾組にあり、薬王山と號す・・・本尊薬師を安ず・十王堂・牛頭天王社､」とあります。上中尾地区菅平の鎮守である吉備明神社が吉備津神社と推測されます。また、石水社、十王堂（閻魔堂)、牛頭天王社（八坂神社）などは、江戸時代から上中尾に伝わる寺社と思われます。

石垣の上の小祠

地蔵尊石像

上中尾区集会所

琴平神社入口

琴平神社

吉備津神社

国道に戻り上中尾バス停を過ぎた右側に注連縄と紙垂に守られた「力石」（？）や如意輪観音石像があります。如意輪観音の横にある雑草に覆われた石段を登るとその奥は廃屋と

なっていました。「秩父往還いまむかし」には石水寺跡地に建てられた上中尾公民館があると記されていますが、廃屋が石水寺跡なのか公民館跡なのか未調査です。一方、「秩父甲州往還」には「右手に八坂神社があり、その裏側が石水寺跡であり、寺の跡が現在公民館になっている。公民館への入口の脇に閻魔堂がある。」と記されています。以上の情報から注連縄の架かった力石の場所が八坂神社でその奥が石水寺跡と推測されます。国道の先の右側上部に閻魔堂（十王堂）と推測される、格子戸で閉ざされた小さなお堂があります。内部に閻魔大王や十王像及び奪衣婆像と思われる仏像などの坐像が安置されていました。この結果から、閻魔堂の存在は確認できましたが、石水寺跡や八坂神社跡らしき寺社は見当たりませんでした。

如意輪観音石像

力石（八坂神社跡）？

閻魔堂（十王堂）

旧上中尾小学校バス停の先が、すでに廃校となっている大滝村立上中尾小学校でした。広い校庭の隅に記念碑 2 基があり「上中尾小学校跡　明治五年八月学制発布され公立大滝小学校開校二年後、甲州信州に通ずる秩父往還沿線大久保耕地以西住民当上中尾耕地石水寺を暫く分教場に当てた。明治四十二年地域の先人達、熱情を傾け、資を蒐め、財を投じ、この地に校舎を建築した。以後、敷地拡張増改築をし、当時全国に例のない小学校寄宿舎建設、高等科設置、国民学校、新制中学校と学制変遷、分校となり、独立上中尾小学校となる。百十余年の経過のうち、住民関係者の努力は弛みなく続けられ、一時二百五十三名を数え、地域文化の中核として幾多人材を育んだ栄光の学び舎は、児童数二十五名となり、大滝小学校に併合、昭和五十六年三月、ついにその幕を閉ざす。まことに感無量なるものあり、ここに上中尾小学校の梗概を勤し建碑して後昆に伝える。　昭和六十三年三月二十七日　大滝村長山口芳夫撰　耕雲山中義一書」及び「大滝村児童寄宿舎回想の碑　昭和十二年五月学区内の遠隔地から通学する児童生徒のため待望の大滝村児童寄宿舎が上中尾分校北西上方二百米地点に県や村、地元の温かい協力に依り開設となった。遠隔地に住む父兄や児童生徒にとって大きな朗報であり希望の光であった。これまで徒歩片道 1～3 時間もかかった通学から一変して近隣の児童生徒と同様にのびのびと勉強やスポーツに励むことができ、学業も飛躍的に向上した。又村としても難題とされた通学問題は解決され、更にこの施設利用者も凡そ三百六十名余が輩出されるなど村の教育振興に大きな足跡を残した。そして昭和二十年代後半に至り上中尾地域に車道が入り産業構造の変化に伴って、この地域の生業としてきた製炭業も衰退し、利用者もなくなり、昭和二十七年四月、所期の役目を果たし閉止となっ

た。当時遠隔地に住む児童生徒のための寄宿舎は我が国では最初でこれによりラジオ放送・映画化されるなど大いに称賛され話題となった施設であった。結びに建碑にご協力頂いた方方に敬意と謝意を記す。　平成二十四年三月　旧上中尾小学校児童寄宿舎記念碑建設委員会」と記されていました。「秩父往還いまむかし」には「大正末期から昭和の初めにかけて、大滝村の奥へは木材関係者や炭焼き人が多数入っていた。」と紹介しています。また、大滝村誌には「焼子は窯場の近くに家族が住める小屋を建て、一家総出の労働で炭木の伐採から製炭・炭俵作り・道路までの運び出しをした。・・・多いときには一山に 30～50 世帯入山していた。就学児童は山小屋から上中尾の学校にかよった。昭和 13 年（1938）当時、上中尾小学校にはこれら山仕事に従事する家の子弟が一学級 43 人もいたことがあった。」と記されています。昭和 20 年代までの林業が盛んであった時代には、多くの子供達で賑わった校舎であったことが、廃校の規模の大きさからも推測できます。

旧上中尾小学校

上中尾小学校跡記念碑

児童寄宿舎

「埼玉県指定有形民俗文化財　上中尾の猪垣（シシガキ）入口　是より 360m」の古ぼけた案内板に従い、国道を右に分岐し斜面に茶畑が広がる車道から薄暗い杉林に入ります。木漏れ日の中に石垣が所々に残され、畑か棚田（？）でもあったのではないかと推測されます。更に奥に進むと石を幅 70～80cm の台形に積んだ猪垣と思われる苔むした遺構が確認できました。ただし、説明板がどこにもないので、残念ながら県指定の「猪垣」とは確定はできません。大滝村誌には「猪・鹿などから農作物の被害を防ぐために、山畑のめぐりに築かれた石積み構造物。地元では『シシグネ』と呼び、上中尾には三カ所ある。」と記されています。風土記稿に「季春より初冬に至るまでは、遠く一二里も隔て、山の頂又は中腹などをひらきし焼畑の場所へ廬を結び、夫婦子母ここに移住して播種し、未熟の時に至りては昼は猿を衛り、夜は鹿を逐ひ、・・・猪鹿を防ぐこと風雨といえども怠らず、其艱難知んぬべし」と記されているほど、猪や鹿の被害に悩まされた奥秩父でした。

上中尾の猪垣・道標

お茶畑

猪垣

両側を杉の植林に覆われた国道の右に馬頭尊の石像が一基残されています。その先に千部供養□（寛政十年十月吉日）・馬頭尊石仏が右手上部の藪の中に安置されていました。更にその先の妙見尾根を削った右側上部に石仏 3 基（地蔵尊？）が人知れず設置されています。「秩父往還いまむかし」には「妙見尾根の先端には地蔵尊が安置されている。この尾根には妙見様も祀られ、神楽殿があった。」と紹介され、妙見様が祀られているので妙見尾根と称されていることが理解できます。この先左側が栃本公衆トイレ（数台分の駐車場有り）・林平バス停です。ここで昼食休憩となります。

千部供養

石仏 3 基（地蔵尊？）

栃本公衆トイレ

国道を少し進むと右側のツツジの植え込みの一段高くなった場所に、昭和四十八年秩父山岳連盟が設置した田部重治の歌碑「栂の尾根　いくつか越えて　栃本の　里えいそぎし旅を忘れじ」が設置され、左隣には清水武甲の詩の一編を刻んだとされる「深い山襞　山影の村　神を迎える　峠」記念碑（平成九年）が建立されています。両碑とも奥秩父の鬱蒼とした樹林に囲まれた静寂な中に佇んでいて、奥秩父の先覚者であった田部重治氏や清水武甲氏に相応しい情景でした。田部重治著「新編　山と渓谷」に、木暮理太郎氏と中村清太郎氏との三人で登山した金峰山より雁坂峠までの紀行文「秩父の旅」（大正５年５月）が掲載されています。その中に「しばらくして檜の植林の間を通り抜けると、雁坂峠に導く道が現れる。やがて人声がするので渓の方を見ると、小屋が見えて薪料を背負って登って来る人がある。もう栃本に来たのである。道が左の方へ一迂回すると栃本の村が真近に見える。なつかしい栃本、憧れていた栃本この村のあるが故に、荒川の深い水源をも造作なく考える栃本、五月の若葉のように深い眼の少女の多い栃本に到頭到着した。・・・秩父の最奥の村といえば如何にも山奥のようなれど、言葉付の雅びやかさ、一挙一動のしとやかさ、山奥には見られぬゆかしさは、これを秩父の栃本に見ることが出来る。」の記載があり、栃本への並々ならぬ憧れと思いが込められています。また、田部重治氏の盟友である木暮理太郎氏の著書「山の憶ひ出」に「奥秩父釜行」（歌誌にひはり第二巻第九号昭和九年九月号所載）の短歌集が掲載されていますが、その中に「栃本」と題して『栃本の宿の風呂場の窓ゆ見る　甲武信ヶ岳は夕曇りせり』の短歌があり、奥秩父をこよなく愛した木暮氏の感慨が込められています。

国道右側には「大峰遊歩道入口」の標識と道標「右ハ秩父町方面及三峯山ニ至ルー左ハ信州甲州ニ至ルー前ハ浜平塩澤ニ至ル、大正十一年一月大滝村青年団分會建設」があります。右折して狭い山道を登ると浜平・塩澤へと続く分岐です。道標を過ぎると、栃本関所跡バス

停につきます。

田部重治・清水武甲歌碑

田部重治歌碑

秩父・甲州信州・浜平分岐

栃本の民家が尾根の急峻な南斜面に点々と広がり、昔から栃本地区として写真に良く紹介された風景が前方に広がります。国道の北側は夏木立に覆われた栃本関所跡です。関所跡の説明板には「国指定史跡　栃本関跡　昭和四十五年十一月十二日指定　江戸幕府は、関東への『入り鉄砲』と関東からの『出女』を取締るため主要な街道に関所を設けた。栃本関は、中山道と甲州街道の間道である秩父往還の通行人を取調べるため設けられたもので、その位置は信州路と甲州路の分岐点になっている。そのはじまりは、戦国時代。甲斐の武田氏が秩父に進出したとき関所を置いて山中氏を任じたと伝えるが、徳川氏の関東入国以後は天領となり、関東郡代伊奈忠次が慶長十九年（1614）大村氏を藩士に任じたという。以後、大村氏は幕末まで藩士の職を代々つとめた。しかし、藩士一名のみでは警備が手薄であったため、寛永二十年（1643）、秩父側の旧大滝村麻生と甲州側の三富村川浦とに加番所を付設して警固を厳重にした。したがってその後、栃本関を通行の者で秩父側から行く者は、まず麻生加番所で手形を示し印鑑を受けて栃本関に差出すことに定められた。関所の役宅は、文政元年（1818）と文政六年（1823）の二度にわたって焼失し、現在の主家は幕末に建てられたもので、その後二階を建て増しするなど改造されたが、玄関や上段の間、および外部の木柵などには、関所のおもかげをよくとどめている。　平成十年十一月　埼玉県教育委員会・秩父市教育委員会」と記されています。麻生加番所や甲州側の川浦口留番所と連携し、秩父往還を通行する旅人を取調べていたことが良くわかります。

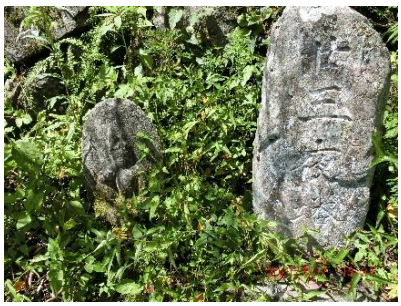
風土記稿に「関所　栃本組にあり、時の御代官持にて、里正大助月俸二口を賜はりて守れり、御道具には三つ道具・十手・捕縄等渡れり、ここは前にのぶる甲州へ通ふ一條の口留番所なり、・・・この関の始めを訪ねるに、甲州全盛の頃より立て、山中右馬允と云へるもの、管かり守りしが、慶長年中故ありて刑せられし後、大助が先祖大村與一郎と云ものに命ぜられしより、其子孫累世これを守りて、今の大助に及ぶと云、この関門・柵矢来等の造営・修復等は古大瀧村にて費用を出すとなり、」と記されています。月俸二口とはどれ程の手当なのか不明ですが、とても十分とは考えられず、地元の負担が大きかったことが推測されます。また、風土記稿に「雁坂峠　御林山の内にて、甲州への一路国界の峠なり、栃本より坤にあたり四里四丁漸上る。」及び「十文字峠　御林山の内にて、栃本より坤にあたり、五里餘にあり、」とあり、栃本が甲州と信州の分岐になっていることが示されています。

栃本地区　　栃本関所跡　　関所跡の説明板

更に川又方面に進むと栃本会館の前に日本の道百選『秩父往還道』石碑があります。側面には「この道は、往時甲州街道と中山道を結ぶ重要な街道であった。沿道の栃本関所跡や路傍の石仏等が歴史を感じさせることから特色ある優れた道の一つとして日本の道百選に撰定された。昭和六十二年三月十八日　大滝村々長　山口芳夫謹書」と記されていました。国道右に石仏 4 基（二十二夜塔、地蔵尊など）があります。「秩父甲州往還」には「峰向寺跡・明治十八年（1885）の月待塔や地蔵など」と紹介されている峰向寺跡への入口と推測されます。風土記稿に「峰向寺　栃本組に在鳳凰山と號す。曹洞宗、光源寺末、本尊阿弥陀、開山慶禅寛永四年三月廿六日化す、」と記されています。曹洞宗の本尊は釈迦如来が一般的と考えられますが、阿弥陀如来が本尊とは珍しく何か特別な謂れがありそうです。国道に戻ると国道の北側に妙見神社がありますが、道標がないので要注意です。

日本の道百選碑　　石仏 4 基　　妙見神社

栃本バス停を少し進んだ右側に真っ赤な郵便ポストと向かい合って分岐があり、傍らの道標には「右ハ信州道、左ハ川又ヲ経テ甲□□ - 大正十一年一月　大滝村青年団分會建設」と刻されています。「甲□□」部分は大滝村誌には「甲州道」と記載があり、欠損部分を補うことが出来ます。信州道は十文字峠を越えて梓山へ、川又道は雁坂峠を越えて、甲州三富へと続く主要な交易と信仰の道でした。分岐を数メートル信州方面に登った右に廿三夜塔、如意輪観音、常夜灯（両面大権現）が並んでいます。「秩父甲州往還」に廿三夜塔には、「天保十三年、左志んしう（信州）、右可うしう（甲州）」と刻されていることが記され、月待塔も道標の役割を果たしていることが分かります。また、常夜灯は十文字峠へと続く信州道の入口に鎮座する両面神社（旧両面大権現）の参道入口でもあります。



十文字峠と雁坂峠の分岐　　道標　　月待塔・如意輪観音石像

旧道を川又方面に下ると右側の車道脇に、草に覆われていますが斜めに登る道があり千軒地蔵尊があります。参道に小ぶりの春日燈籠が並んだ奥にブロック積の御堂があり、ピンクの衣を纏った地蔵尊が安置されています。堂内には夥しい数の千羽鶴が地蔵尊の左右に奉納され、天上には大きな鳳凰が描かれていました。地元の篤い信仰が感じられる地蔵尊です。堂内に掲げられた説明板に「千軒地蔵尊の由来　戦国時代、甲斐武田の家臣が荒川上流股の沢に金鉱を発見、鉱山の発展と従事者の安全、周辺住民の繁栄を念願し、千軒地蔵尊と御命名、同地の普門寺傍に安置されたといわれる。山の閉山後、故あって御尊体はこの地に遷座された。屋内天井の鳳凰の画は大正十年この付近の住民有志の寄付により、東京に依託貨車運送車トロッコ等により搬送された。板片の墨画は山中宗治氏村長の頃、御依頼の作品で旧建物に使用されたものである。」と記されています。また、「秩父往還いまむかし」には「この地蔵は、大滝村の奥谷にあった武田家の金山が栄えて、千軒になったのを記念して作られた。武田家滅亡後、ある強力が『廃墟の金山へお地蔵様を一人でおいておくのはかわいそうだ』といって、金山跡から背負い出してきた。栃本の近くまでくると不思議なことに、急に地蔵が重くなり運べなくなってしまった。さすがの強力もしかたなく、そこにおろして祀ったのが今の千軒地蔵尊であるという。」とこの場所に安置された謂れを記しています。奥秩父で金山が栄えていた頃の地蔵尊が、閉山後にここに移されたことが分かります。

千軒地蔵尊　　千軒地蔵尊　　東京大学栃本作業所

更に川又方面に下ると右側に東京大学農学部附属秩父演習林栃本作業所があります。奥秩父の広大な演習林を管理する東京大学付属の施設です。前方左側に彩甲斐街道（現在の国道 140 号）の車道が見えてくると、まもなく川又バス停につきます。ロータリーの傍に公衆トイレが設置され、少し離れた栃本側に休憩所の東屋もあります。

川又・公衆トイレ　　川又バス停　　西武観光バス

往路を麻生バス停まで戻り、旧秩父往還と分かれて国道 140 号を下って秩父湖畔に降ります。秩父湖の湖岸遊歩道から駒ケ岳橋を越えて、二瀬ダム駐車場に戻りました。猛暑のため、二瀬ダム駐車場の向かい側にある自販機には、冷たいものを求めて多くの参加者が取り囲む光景が見られました。

旧秩父往還と国道 140 号分岐　　湖岸遊歩道へ　　二瀬隧道

今回の古道調査では、夏季における植生及び鳥類の調査を併せて実行委員に依頼しました。その結果、植物では、ツチアケビ（ラン科）など、野鳥については、イワツバメ、トビ、ウグイス、セキレイ、ミソサザイ、センダイムシクイ、コゲラ、シジュウカラなどが確認されています。民俗的な調査と同時に、植生、野生動物、鳥類、地質等の記録は、古道を含む地域を理解する上で、貴重な資料になるものと考えられます。

松本敏夫記

参考資料

○歴史の道調査報告書・第 11 集・秩父甲州往還（編集・埼玉県教育委員会／埼玉県立博物館）、平成二年四月発行

○大日本地誌大系、新編武蔵風土記稿（第 12 巻）・秩父郡・古大瀧村（雄山閣）、昭和四十六年二月二十五日発行

○5 万分の 1 地形図「三峰」、明治 43 年測図・大正 2.4.30 発行

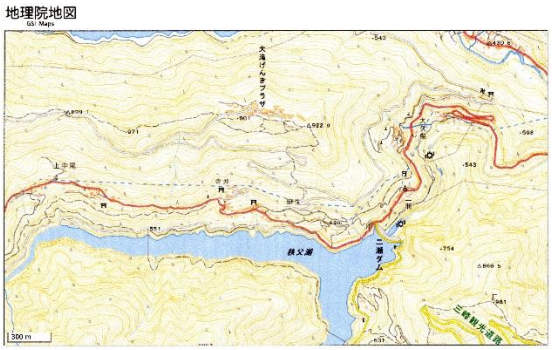
○大滝村誌（編集・秩父市大滝村誌編さん委員会）、発行・秩父市、平成二三年（2011 年）三月三一日発行

○飯野頼治著「秩父往還いまむかし」（さきたま出版会）、平成 11 年 2 月 15 日発行

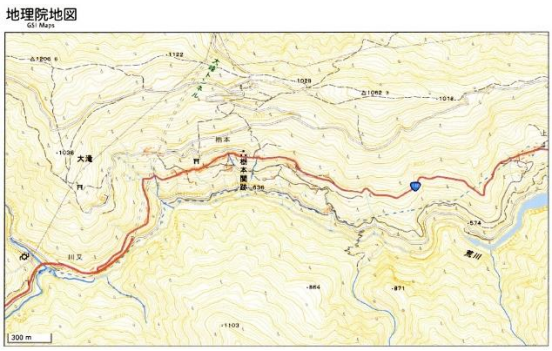
○飯野頼治著「地図で歩く秩父路」（さきたま出版会）、2006 年 12 月 10 日発行

○田部重治著・近藤信行編「新編　山と渓谷」（岩波文庫）、1993 年 8 月 18 日発行
○木暮理太郎著「日本岳人全集　山の憶ひ出」（日本文芸社）、昭和 44 年 4 月 20 日発行
○国土地理院（2 万 5 千分の 1 地形図）「中津峡」、「三峰」
https://maps.gsi.go.jp/#15/35.948863/138.887632/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1
○ジオグラフィカ GPS データ

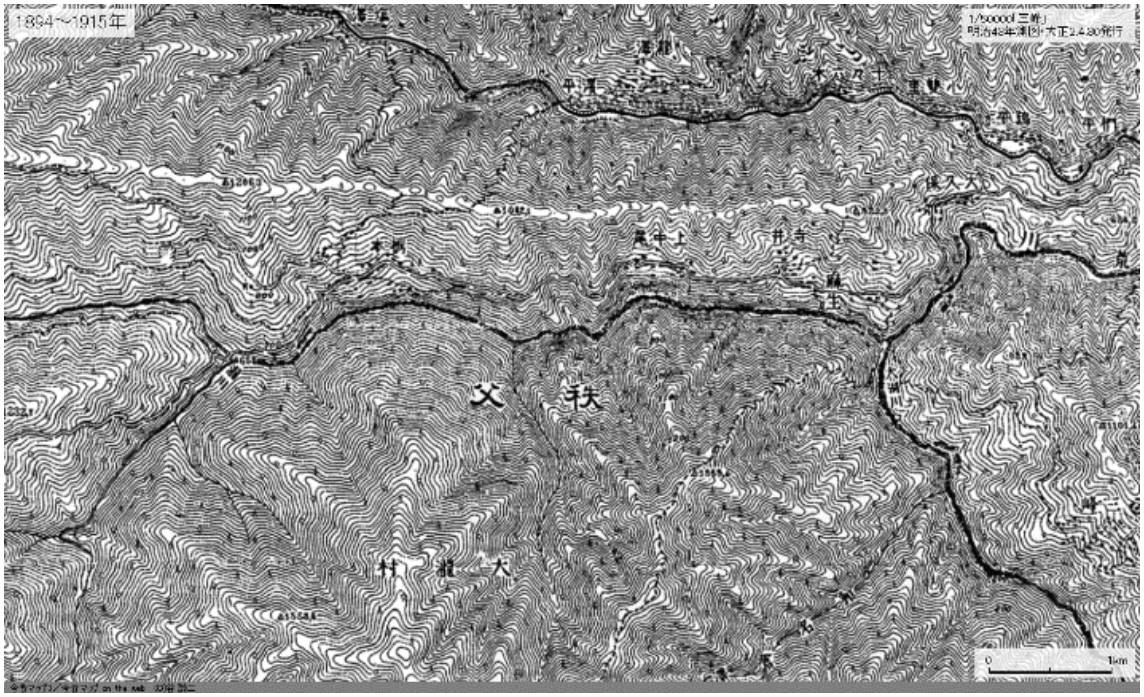
二瀬ダムにて（古道調査参加者）



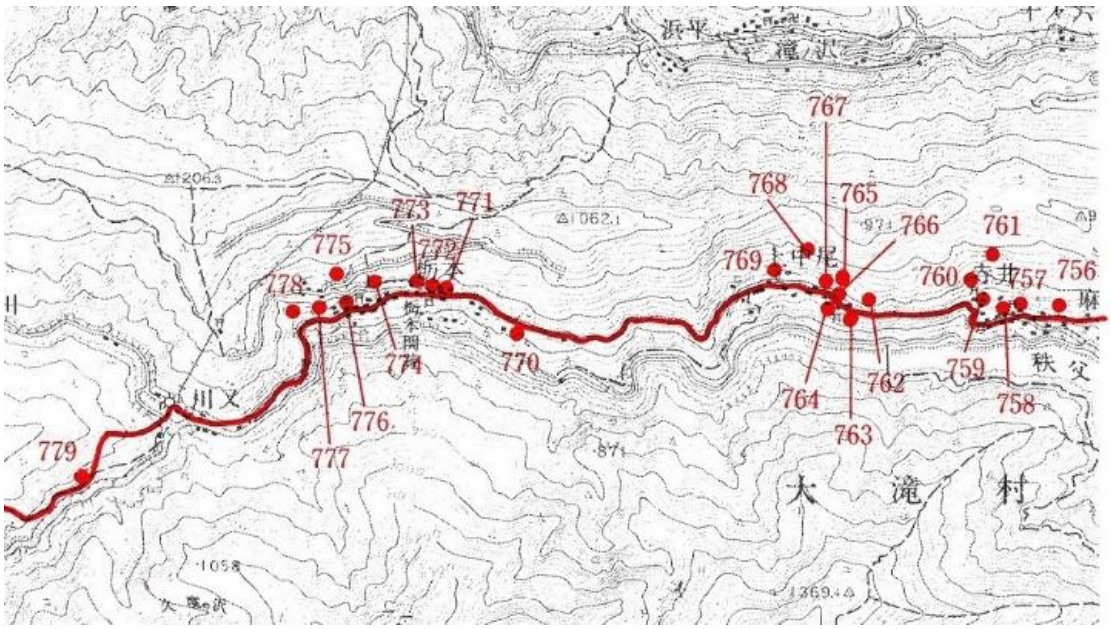
国土地理院地形図



国土地理院地形図



明治 43 年測図・地形図



歴史の道調査報告書・第 11 集・秩父甲州往還

GPS データ（二瀬ダム～麻生～上中尾～栃本～信州と甲州の分岐道標）

ジオグラフィカ・トラック